

栄光館前の「皇后陛下行啓紀念」碑

——キリスト教學園と天皇制——

田中真人

今出川通に面した女子部の正門を入ると正面に一九三二年に建設された栄光館がある。

その向かつて左側の植え込みのなかに、樹木に見え隠れしながら、高さ二メートルを越す

と思われる石碑が立っている。石碑正面には

「皇后陛下行啓紀念」とあり、裏面を含めてそれ以外何も刻まれてはいない。そのすぐ左の

小さな石柱にはめこまれた銅版のタブレット

にある説明によって、皇后は一九二四年二月八日に同志社女学校に来て、三時間半にわ

たり、朝拝式を参観し、授業ぶりや諸施設を

見学したこと、時の海老名弾正総長を始めとする同志社関係者にとり無上の光栄であった

こと、「爾来十五年、当日ノ感激今ニ忘スル

ヲ得ズ」として、一九三八年にこの碑が建設せられたこと、碑文の揮毫は同志社行啓当時の宮内大臣牧野伸顕であることなどが知られる。

それにしても皇后が来校してから、一四年も経ってからこのような仰々しい構築物を建てたのはなぜだろう。同志社に吹きつけたいた時勢の波風を和らげる遮蔽物としての役割を期待したものと考えるのが、今となつては常識的解釈といえよう。

この記念碑が建てられた前年、一九三七年の暮れ、第一〇代総長湯浅八郎が辞任した。湯浅の在任中の二年半は、同志社が時局の風

棚事件」、翌二六年の『同志社論叢』への国体明徴論文寄稿掲載拒否事件と、これを契機としたかねてからの法学部の内訌の激化、その結果として林要・具島兼三郎・林信雄らの辞職と田畑忍の休職、一九三七年三月の「同志社ハ教育ニ関スル勅語並詔書ヲ奉戴シ基督ニ拠ル信念ノ力ヲ以テ聖旨ノ実践躬行ヲ期ス」などとする同志社教育綱領の改定、「御真影」の下付申請とその奉安室設置、図書館屋上の国旗掲揚台の改築、紀元節・明治節などにおける儀式の励行と「君が代」斉唱の徹底などが行なわれた。

これらのことは湯浅総長が同志社に対する風圧を少しでも和らげようと、あるときは意識的に、あるときは余儀なく取った妥協でもあった。しかし一九三七年一月の「人民戦線事件」関連での新村猛、真下信一両教授の検挙でもって、湯浅はこれ以上の抵抗はできないとして総長を辞任した。新村・真下両教授は戦後、同志社への復帰を求められたさい、逮捕されただけでその処分の帰趨も明確でない時点で、ただちに辞職を求めた同志社の対応に対するこだわりから復職しなかったという。同志社は自由主義的、反国体的であるゆ



1924年12月8日の皇后同志社来学を記念し、1938年12月に建てられた、栄光館前の「皇后行啓記念碑」

えに、卒業生が就職も出来ない、いやそのうちにつぶされるのではないかという風評の飛び交っていた当時の状況のなかで同志社は余裕を失っていた。皇后行啓記念碑はこうしただけで建てられた。同志社は反国体的学校ではない、国母陛下御自らにおいてになった、公認された学校であるという証として。

皇后が同志社に来校した一九二〇年代は同志社の発展確立期といえる。従来の専門学校

令にもとずく同志社大学は、一九一八年に公布された新大学令による大学に改組され、その基準をみたす設備とスタッフの充実、学科学科の新設などが計られた。第八代総長として一九二〇年に着任した海老名弾正の在任の八年間は、おりから同志社創立五〇周年を迎えたときでもあった。そしてこの頃は法学部を中心に「同志社アカデミズム」の確立をささえる多くの教員が就任した。すなわち中島

重・今中麿・和田武は海老名の要請で迎えられた吉野作造の門下生であり、住谷悦治・山本亀一・古屋美貞らは、海老名の本郷教会や「新人」の流れをくむ人脈といえる。このほか恒藤恭・長谷部文雄・河野密・林要・阿部賢一らもつぎつぎと加わった。一九三〇年代において、自由主義的、あるいは容共主義的として追及されることになる同志社の教員の主力はこの海老名時代に同志社にやって来た（古屋のように逆の立場となる者もふくめて）。

この海老名時代に皇后が来学したことは、かつて異端視され邪教視され、日本社会のマイノリティであり、それゆえに苦闘の歴史を歩んだ日本のキリスト教界と同志社が、日本で揺るぎない地歩とステイタスを確立したことを示す一大デモンストレーションであった。同志社女学校校友会・同窓会はその『季報』第五〇号を「行啓記念号」として一九二五年の紀元節に発行した。海老名はそこで次のように述べている。

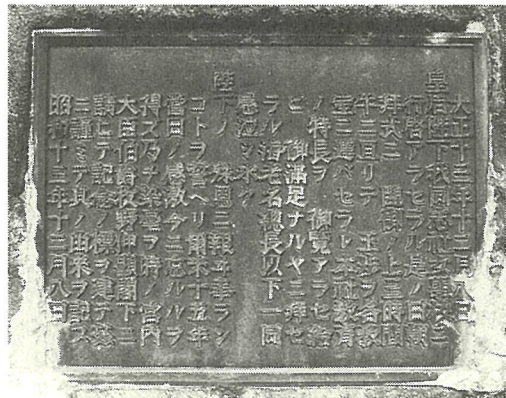
国母陛下が同志社女学校に行啓になりたるは、女学校の為のみならず全同志社にとりて、如何ばかりの幸福であつたか

わからない。同志社は創立以来基督教主義を標榜してきたから種々の障害物が横たはつてをつた。永い間政府当局も之を邪魔物と思ひ、国民の多数も之を嫌悪してをつた。従つて同志社の発展が捗々しく運ばなかつたのである。

(中略) 国母陛下は、御自ら行啓あそばされて、因習の偏見を奇麗にとり去り給うた。そのみならず我々は、学生生徒の増加とともに、基督教の色彩が寧ろ稀薄になつてゐたかと思ひ、自ら戒め、自ら恥ぢ、恐縮した位である。(中略)

今や同志社が創立五十周年を一期として、その本来の精神的教育を以て面目一新すべき時期にあるは、同志社内外より要求するところである。この際 国母陛下の行啓が我々にとって多大の奨励となつたことは、感謝して措く能はざる所である。

一九二四年二月八日、皇后の台臨を仰いで始められた講堂での朝拝式は、まず君が代、つづいて賛美歌の斉唱でもって始められた。選ばれた賛美歌は「わがやまのくにをまもり あらぶる かぜをしづめ よ、やすけ



記念碑建設の由来を説明した銘版

く をさめたまえ わがかみ」という歌詞で、のち戦時下において儀式における賛美歌の斉唱自体が問題視されるようになったときに、許容されるであろう歌としてしばしば選曲されることになるものである。続いて総長による聖書朗読と祈祷文は次のようなものであつた。

天に在します、我らの父よ。願くは御名をあがめさせ給へ、御国を来らせ給へ、

御意の天になるごとく、地にもなさせ給へ

恩愛に充ち給ふ父よ

今日茲に 国母陛下を迎へ奉り、我らが喜びと光栄の如何ばかりかは、神のしろしめす所、我らは感謝に堪へませぬ。願くは、皇室のいや栄えに栄え、我等の喜びと光栄との上に限りなく
上天の祝福を降ろし給へ。

在さる所なき神よ。願くは我らの心が聖き靈にて洗ひ潔められ、神の住み給ふ活ける神殿となることを得させ給へ。而して健にして素直なるすがすがしき国民たることを得させ給へ。願くは父なる神の恩寵上は 皇室下は国民の上にとこしなへに豊かならんことを。アーメン

式はこのあと生徒による唱歌「Glorious Forever」の合唱で終り、皇后はゼームス館二階三四号室に充てられた便殿で小休止の後、予科・英文科の授業ぶりを参観した。ミズデントンによる家政科の割烹実習でおこなつたマールケキーの作り方に関心を寄せ、老体のデントンが赤十字社や愛国婦人会にも教えに行つてゐることを聞き、とくに言葉を掛け

た。また新島襄の遺影の前ではその夭折を惜しみ、海老名に「今日まで生きていたら、さぞ悦んだであろう」と述べた。

皇后は土産として海老名総長に袴地一反、松田女学校長に羽二重一疋、職員生徒一同にお菓子料六百元の下賜があった。新島八重・海老名夫人・ラーネッド、デントン両女史には菓子と与えられた。生徒製作の書画帖一帙と、同窓会より和洋聖書二冊と賛美歌一冊を献上し「かしこくも御嘉納を蒙った」。生徒にはこの日学校より記念の紅白の饅頭が配布された。

海老名はこの後一九二六年二月一日、大正天皇「御不例」にあたり葉山御用邸に伺候し、その前には病氣平癒の祈禱会、死後の二月三〇日には全校あげての奉悼式を行なっている。そして一九二七年二月七日の大正天皇大喪、一九二八年一月一〇日の昭和天皇即位礼に同志社総長として参列した。即位礼のメインの儀式である紫宸殿の儀の参列資格者は外国からの賓客を含めて三〇〇〇名であった。その参列資格は位階勲等、宮中席次がものを言う。いわば天皇制国家との距離、それに対する貢献度を目に見える形で表わす

ものとなる。大学関係についていえば帝国大学総長は全員が参列を許されたが、その他の官立大学長は有志だけとなる。ましてや私立大学長は全国で一桁に過ぎぬ代表が参列を許されたにすぎない。その数少ない私立学校代表として、キリスト教主義に立つ同志社が選ばれたのである。さらに同志社は一連の即位関係儀式が終った後、京都御苑内に設けられていた賓客の控え所である「朝集所」の建物を下げ渡され、これを移築して中学校の武道場とした。

昭和の天皇代替わり儀式において、同志社は日本の代表的私立学校として揺るぎない地歩を築き上げていることを示すこととなった。その地歩は天皇制に擦り寄り、その權威を以って示されたものであった。近代日本におけるキリスト教は、異端であり少数派であるゆえに、天皇制イデオロギーの枠にはまらない多くの思想家を生み出した。全く同様の理由から正統派、多数派、その頂点である天皇と天皇制国家に意識的に一体化することにより、その安全をはかり、その地歩を確保しようとした。栄光館前の「皇后陛下行啓記念碑」は、こうした近代天皇制国家におけるキ

リスト教とキリスト教学園のおかれた状況を象徴的に示すもののように思われる。

この記念碑はファシズムの狂乱が同志社を圧迫した時代の忌まわしい遺物だから撤去すべきだとの意見も聞く、しかし私はむしろ同志社の歴史的記念碑として保存すべきだと思う。なぜ一九二四年に皇后は同志社に來たか、なぜそれから一四年経ってからこの碑が建てられたか、『同志社百年史』はそれぞれについて第三部第五章（西田毅執筆）および第三部第二章・第四部第九章（宮澤正典執筆）で記述されているが、あらためて碑の横に説明版をつけるべきだろう。それは近代日本のキリスト教と同志社の歴史の素晴らしい実物教育となるはずだ。

（大学人文学研究所教授）

何んのために同志社へ行ったか

早瀬圭一

日曜日の夜はビールを飲みながらテレビを見るのが習慣になつてゐる。めつたに引き込まれる番組はないが、過日のフジテレビ（関西は関西テレビ）夜八時はよかった。「なんて

つたつて好奇心 初公開ノ仏国・猛烈シェフ 学校日本人七十八人汗と涙の二五〇日戦争 亦然!?感動のお一人様三百万円」

NHKも含めて長いタイトルは最近のテレビ番組の特徴だが、それはともかく、この一時間ものはバリのシェフ学校でしほりにしほられる七十八人の若者のルポで、久々に内容のある面白いものだった。その中で特に印象に残ったのは、若者の一人が「日本で、何の目的もなく三流大学へ行くよりもこちらの方

がはるかにいい」とシェフ学校に入った理由を語った点である。なるほどと思つた。

いまは大学が義務教育化している。やや皮肉っぽい言いかたをするなら、よほど変人かよほど自らの将来進むべき道をしっかりと定めている者以外はほとんどが大学へ行く。司法試験に合格して弁護士になりたいとか、公認会計士に受かりたいとか、公務員の上級職などに目標を定めている者はまだましな方で、ほとんどは大学入学時点でこれといった目的意識はない。特に文科系の場合はそうだろう。まして、具体的にあの教授の講義が聞きたいからあの大学に入る、これこれの勉強をするためにこの大学を選ぶ、などという学

生は皆無に近いのではないか。

例えば、今春同志社大学に入ってきた学生のうち、入学試験の実力からいえば京都大学に合格することが出来たのだが、同志社に行きたかったのでこちらに来たという学生が何人ぐらいいるだろう。何年か前、慶応大学ラグビー部が同志社と大学日本一を争つて惜敗したときの松永主将（現在横河電機）は京大に合格しながらラグビーをやるために慶応に入学したという。学問でなくてラグビーでもかまわない。そんな学生が同志社全体にどれくらいいるか。もし京大や東大あるいは早慶に入学出来たらそちらに行くが、実力が伴わないので同志社に入ったという学生がほとんどで、そのことを大学の教職員が何ら不思議に思わないか、馴れっことになっているとしたら、まことにもつて残念至極である。

そんなことをいうと、僕自身、天にツバするようなものだが、このさい敢えて自分のことを言うと、僕が大学にどうしても行きたかったのは、新聞記者になリたかつたからである。当時（いまから三十年ほど前だが）新聞記者になるには、ともかく大学卒業ないしは卒業予定の資格が必要であつた。そうでなけ

れば新聞社の入社試験を受けることが出来なかった。そのためにはどんなことがあっても、どこかの大学に入り、そこを卒業しなければならぬ。高校一年のとき父に死なれたため、年老いた母と僕は、大阪市南区東賑町三十三番地、崖下のじめじめした一日中陽の当たらない貧民窟のような長屋の一軒に引越さなければならなかった。母は近所の零細企業で朝から夜遅くまで働き、母子がやっと生活出来る状態だった。そんな家庭の事情からいえば、大学どころではなかった。高校を卒業するとさえやつとである。当時は高卒で就職する者も多く、大学へ進む者との比率は半々かむしろ高卒就職組の方が多かったのではなかったか。

だが、僕はどうしても大学に行きたかった。行かねばならなかった。将来の職業として新聞記者以外に考えられなかったからである。そんな状況下で無理して大学に行くとするれば金のかからない公立大学を目標にすべきであろう。げんにクラス担任から、家からも近い大阪市立大学をねらうべきだと言われた。ただしこれには条件がついていてよほど今より成績がアップした場合に限ってということだ

った。母子家庭の孝行息子（生前の父が酒乱で母をいつもいじめていたので、それを見ていた僕は母想いであつた）は、小説やドラマなら大抵勉強もよく出来るものと筋書きは決まっている。現実はそのでない。僕は徹底して理数に弱かつた。いや正直に言えば英語なんかも出来が良くなかった。そのくせ、なぜか僕は早くから同志社大学にあこがれていた。中学三年の夏休み、友人三人と京都まで遊びに行き、御所を通つて偶然同志社のキャンパスに入つてしまい、その環境に魅せられてしまった。「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来たらんことを」と刻まれた校祖新島襄の言葉も気に入つた。旧制三高出身の父は（その頃まで生きていた）「学生生活を送るなら京都だ。東京なんて社会人になればいいやでも住みつくようになる」と口ぐせのように言っていた。高校生の頃何度か京都に遊びに行き、そのつど同志社に寄つた。そのときのいつだったか、田畑忍法学部教授（学長だったろうか）が「これこれ実現のために自分は梨果を断つ」という意味の立看板を出しておられた。権力に立ち向かう気風と自由な雰囲気が大学の中にあふれているように感じたものであ

る。

高校を卒業して一年後、やつとこのことで同志社の一隅にもぐり込んだ。

恥かしい話だが、四年間にこれこれを学びたいとか、誰それ教授の講義を聴きたいなどとは考えなかった。アルバイトというよりは本格稼働に近い形で働き、合間をぬつて大阪から京都に通つた。ともかく卒業して新聞社に入る、そのことだけが頭にあつた。何年のときに、どういう動機からかまつたか思い

出せないが、安永武人教授の授業を受けた。安永さんは、当時ベストセラーとなつていた五味川純平の「人間の条件」や話題となつた映画「ロベール將軍」を取りあげた。そして「感動の再発見」という言葉を再三口にした。何かを読んだり映画や絵画をみて、あるいは音楽を聴き感動したとき、引きつけられたとき、自分は何に感動し、どこに引きつけられたのかを「再発見」するべきである、と教授は繰り返した。

同志社の四年間で何か一番印象に残っているか、と聞かれたら僕はためらうことなく、この安永教授の「感動の再発見」をあげる。それまでに読んだ文学作品のすべてについて

僕は「感動の再発見」を試みた。自らの心をさぐっていく「感動の再発見」はなかなか困難な作業でもある。だが教授の講義を聴いて以後、今日に至るまで、僕はどこかで、(書物や映画絵画音楽に限らず)僕の心を衝き動かすものに出合ったとき、必ず「感動の再発見」を試みることにしている。そうすることによって自分自身の心の動きを知ることが出来るし、出合ったものをもう一度別の角度から観察し直すことにもなるからである。

大学四年生の秋、僕は自分の実力(この場合は学業成績というべきかも知れない)からみて応募出来そうな二、三の地方紙(高知新聞、北海タイムス、夕刊フクニチなど)の試験を受けようと就職課に学校推薦をもらいに行ったが、いずれもあつさりはねられた。かくなるうへは、学校推薦枠のない、応募しさえすれば誰でも受験出来る「朝日」か「毎日」しかなかった。朝日新聞社と毎日新聞社では大学卒業見込みの者が卒業して二十七八歳未満の者は全国どこの大学であろうがいつさい区別せず、成績も関係なく入社試験を受けることが出来ることになっていた。

迷ったあげく二社のうち、僕は「毎日」の

試験を受けた。二社は同じ日に試験を実施したのでどちらか一方しか受験出来ない。「毎日」を選んだのは試験科目に「外国語」がなかったからだ(実は英語の試験があつたのだが、入社後人事部長の説明によると、「英語は大卒者を対象にことさら外国語というほどのものではなく、一般常識物の範囲内である」とのことだった)。筆記試験は一般常識、作文、講演筆記とあつて、その後、集団討論、個人面接と続いた。二百倍とか三百倍という激しい競争率だったのは、学校推薦という枠がなく、誰でも受験出来たからであろう。筆記試験では作文にウエイトが置かれていたから、僕のような学業成績の悪い異端児でも最後まで残ることが出来たのだと思う。学校に行つて田村聰舟、法学部事務長(当時)に毎日新聞社から入社内定の電報が来たことを報告すると、しばらく笑つてとり合つてもうえなかつたのをおぼえている。(いま、毎日新聞社の入社試験は満二十二歳から二十八歳までなら誰でも受験できる。大学卒でなくともいい。学歴不問である)。

同期生約四十人の大半は東大と京大そして早稲田の出身だった。入社して満三十年が経

つ。敢えて言わせてもらえば、その間、僕は東大や京大や早稲田出身の同期生よりも新聞記者として劣ると思つたり負けると感じたことは一度もない。回りの人間がどう受けとめているか知らないが、取材力や文章力、企画力などで、むしろ僕は同期生の誰にもひけをとらなかつたつもりだ。うぬぼれもいいところと笑わば笑え。僕はそう確信している。こんなことは普段なら滅多に言えないことだが、なにしろ母校の「同志社時報」に書かせてもらつているのだ。身内の甘えで許してもらいたい。

僕のようなものが、果して同志社出身と晴がましい口をきいていいものかどうか心許ないが、心の中では同志社OBであることを常に誇りに思っている。ラグビー好きの僕は同志社の試合という、万障繰りと合わせて見に行く。岡仁詩部長が京産大とのゲームのさなかに倒れたのもOBの僕たちが日頃無責任にあれこれ言つてプレッシャーをかけすぎたのかも知れない。何年か前の正月、国立競技場で同志社が早稲田に敗れて学生日本一を逃した夜、下北沢の寿司屋で泣きながら酒を飲んだことは岡さんにも言わなかつた。暗い青

春を過ごさざるを得なかった僕が三十年を経て、自分の気持をラグビーの十五人に話したいきさつは簡単に説明出来そうもなかったからだ。

「同志社時報」を拝読すると、同志社が生き残る道あるいは将来といったことを真剣に討議、検索しておられる。他のどの大学でもなく同志社に入学したいと思つて入ってくる学生、同志社を出たことを誇りに思い続けるOB、そういう人たちを一人でも多く増やすにはどうしたらいいのか。僕に独断と偏見による案がないわけではないが、与えられた紙幅がきた。次の機会が与えられるのを待ちたい。

(一九六一(昭和三十六)年大学法学部卒業・毎日新聞社東京本社編集委員)

早瀬圭一はやせ・けいいち

一九三七年大阪生れ。一九六一年毎日新聞社に入り、中部本社報道部、大阪・東京両本社社会部、「サンデー毎日」副編集長、同別冊編集長を経て編集委員。82年「長い命のために」で、大宅ノンフィクション賞を受賞したライターで、殺人犯の立場から書

いた長編ルポ「失われしもの」や女子刑務所の肉声を伝えた「長い午後」などの話題作を次々と著す。他に東京・武蔵野市の有料福祉の現場に迫った「長らえしとき」がある。自伝風なユーモア小説「コオロギ上京す」(文藝春秋)の他、「転職」(新潮社)「僕の出合った女」(文化出版局)。「毎日新聞」を代表するジャーナリスト。近著に「痛快ワンマン町づくり」。今春五月、文藝春秋から「過ぎし愛のとき」が刊行される。

(「現代マスコミ人物事典」より)

池袋清風日記

明治一七年―上・下―

明治一八年六月に、同志社英学校邦語神学科を卒業し、同志社女学校教員、同志社図書館司書をつとめた池袋清風が、日々の出来事を克明に記録した明治一七年の日記全文を翻刻・刊行したもので、学生生徒の修学、伝道をはじめ寮生活、教員(外国人教員を含む)の動静などが、克明に記録されている。清風は在学中から桂園派の歌人として知られており、寮の彼の居室での和歌指導の模様や、歌人との交友の記録は、近代文学史の資料としても価値をもつものである。

発行・同志社社史資料室

A5判 約三〇〇頁 各一、〇〇〇円

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)七五一―三〇三七・三〇三八

「たかがスポーツ」と言うけれど

釜池 進

この頃、推薦入学試験の面接で、同志社大学への志望理由や若し大学に入れたらどんな大学生活をしたいか、という質問をすると、紋切型の答えが多くてうんざりさせられることが多い、中でも、「同志社大学には色々なクラブがあるので、大学生活を楽しむために何か適当なところに入ってみたい」とか、「○○クラブは非常に強く、憧れているので是非ともそこで思い切りやってみたい」というような答えが最初に出てきて、こちらが戸迷うことがある。しかも悪びれずにそういう答え方をするので、「勉強する方はどうなっているのか」とたずねると、「はい、勉強もします」と言う。「勉強もする」というのであるから、学

問の方は「ついでに」という付属物なのである。この傾向は、こしばらくはおさまりそうもない。就職に際して運動選手が歓迎されるという現実が同時にこの風潮に拍車をかけることにもなっているようだ。しかし、だからといって筆者は運動選手や体育系クラブの活動に批判的になるつもりは毛頭ない。むしろその逆である。

メキシコオリンピックで日本のサッカーチームが優秀な成績を治めたことは、衆人が記憶している快挙であった。以下はその時の話である。

オリンピックのサッカー試合の過程で勝ち

進んで行くと、各チームは次の対戦チームを観察し、次の試合のための研究をする。くわしいことは失念しているが、日本チームが勝ち進んである国と対戦している時、次に日本と戦うことになっているチームが日本チームの試合を観察していた。そして、日本チームの中で最もよく働いているある選手をマークした。それはキャプテンの、たしか八重樫という選手であった。試合当日、相手のチームはもちろんこの八重樫をマークした。そして彼を猛烈にチャージした。その結果、八重樫選手はひどい怪我をし、次の試合に出場出来なくなつた。当然練習も出来ない。試合の翌日、他の選手が練習を終え、宿舎に帰ると、八重樫キャプテンは他の選手達のユニフォームを洗濯していた。それをみて選手達は口々に「キャプテンにそんなことをしてもらつては困ります。汚れ物は自分達で洗いますから休んでいて下さい」と言つた。これを聞いて八重樫選手は次のように答えた。

「俺はこのとおり怪我をしている。練習にも出れない。今俺がチームのために出来ることはこういうことしかないのだ。これは今の俺の仕事だ。君達は何も言わず練習に専念し

ろ。」

仏教の教えに「随処に主と作れば、立処皆真なり」という言葉がある。臨済禪師の書いた『臨済録』に見える。大乘仏教の基本思想を表す言葉とも言われているが、平たく言う、「自分を失わないでいれば、どんな場合でも本物になれるのだ」ということになる。このことをもう少し理解しやすくするために、大珠慧海という人と源律師との問答を紹介する。

源 「あなたは道を修めて努力していられますか」

大珠 「努力している」

源 「どう努力していられるのですか」
大珠 「腹がへつたら飯を食い、眠くなつたら眠る」

源 「そんなことならだれでも師と同じことをしています」

大珠 「それは違う」
源 「なぜ同じでないのですか」
大珠 「彼らは飯を食うときに食うことを肯わない」

すなわち、他の人達はものを食べるときに、うまいとかまずいとか、お腹にいいとか悪いとか考えて、食べることを素直にそのまま認めないで、さまざまな計らいを加える。眠るときも早く寝ると早く目が覚めて困るとか、寝る場所が変わると、寝つけないかもしれない、と眠ることにすら素直になれない。このように人々は人生全部について様々な計らいを加えているのである。ところがこの大珠という僧は、ものごとをするのにこのような計らいを加えない。それによって「随処に主となり」、居るところそのままがすぐ本物になっていき、三昧の境地に入っていけるわけである。源律師にそういうことを教えるつもりで言ったのである。

禪の始祖、達摩から数えて六祖にあたる慧能は名僧としてその言行が伝えられている。次の話はある修業僧が慧能をしたって教えを乞いにやって来た時のことと記憶している。一人の僧が斧で竹を切っているのに出会った。その人が慧能であることがわかるとその修業僧は非常に驚いた。高名な僧のことだから寺院の奥で座禅三昧境にあることと思ひ込んでいた修業僧は、慧能がこともあろうに下

働きの人達がするような飯焚用の竹を切っている。そこで「何故そんなことをしていらつしやるのですか」とたずねた。これに対して慧能は「今私がすべきことをしているのだ」と答えた。これを聞いた修業僧は、はたと大悟したということだ。「その時、その場で為すべきことに徹すること。ことの大小、善悪は分別の中の問題。仏心は善にもおちず、悪にもおちず、善悪を越えて動き働く、無分別の分割——絶体一者」である。慧能の行為はどのように理解できるようである。ここで言うところの「分別」は、前の話にある「計らい」と同義と考えてよい。

筆者は冒頭に引いた八重樫選手の行動の中に、「分別」、「計らい」を離れた姿を見るのである。明治生まれの母親は、ひたすら夫に仕え、子を育て、炊事・洗濯・針仕事に明け暮る子供はそういう母の後姿を見て育った。そういう母親の行為に計らいがあつただろうか。やつている仕事に対して「つまらない」とか「やり甲斐がある」とかという分別が働いていただろうか。そういう母親を持った子供が母に対して自然と尊敬の念を抱くのは「随処に

主」となり得ている母の姿に対して手を合わせているからである。長い人生には逃げようとしても、どうしても逃げられない、耐え切れそうにない場もある。生涯に一度ならず絶体絶命の場がある。その時に愚痴や不満をぶちまけても何の役にも立たないものだ。そうではなく、置かれた場に生き切ること、そしてどんな場であつてもその場の主人公になる。「随処に主と作れば、立処皆真なり」。その心が出来た時、初めてその人の本当に生きている姿が出てくる。

もし、スポーツがこういう人間をつくる場であれば、どんなにか人間的なものになれることだろう。「たかがスポーツ」というけれど、八重樫選手は自分が置かれている場に生ききつた人である。すなわち、スポーツによって自己を発見し、そこを自己完成の場としたのである。

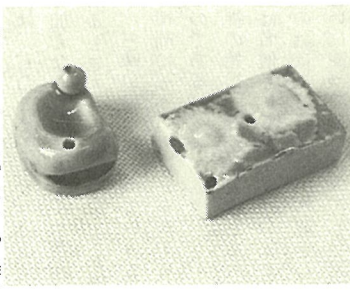
(大学経済学部教授)

同志社校地出土の埋蔵文化財(17)

鈴木 重治

そのつけくかもんすいてき
染付菊花文水滴

せいじとびつてつしやうまめがたすいてき
青磁飛鉄砂空豆形水滴



筆をとる前に硯に向う。墨を擦るためである。水滴から硯の海の部分へ、程よくしずくを落す。練墨を軽く持つて、心を鎮めて無心に擦る。光沢をもった黒々とした墨が擦り上る。このような光景を見なくなつたし、あまりしなくもなつた。

日常生活の中から姿を消していった文具類の中で、もつとも愛らしいものの一つが水滴である。硯が使われるようになってす

でに古いが、古墳時代以降の出土品についてみると、奈良県斑鳩町の御坊山三号墳で検出された中国からの輸入品である三彩の陶硯が知られている。しかし、それに伴う水滴はない。

出土品でみるかぎり、水滴の普及は江戸時代に入ってからであり、とりわけ伊万里焼の磁器が、全国的に流通する頃からである。もとより水滴の材質には金属や漆器などもあるが、これらは地中での保存が悪く、資料としては残り易い陶磁器の中に貴重なものが含まれている。

写真に示した資料は、公家屋敷の旧二条家地点からの出土資料で、ともに伊万里焼の製品であるが、片方が染付で他の一方が青磁である。型造りの菊花文を影青で、葉を呉須で飾つた長方形の水滴は、上面の中央と一カ所の隅に小孔をもつていて、使い易さと簡潔な美が追求された造形を示す。

一方、空豆形の水滴は、青磁の青緑色と飛鉄砂風の黒色を含めて、写実的な造形が特徴的であり、使用者の心情に答えた作品といえよう。季節感のあふれた水滴の優品である。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)

中欧が動いた年



ベルリンの象徴ーブランデンブルク門



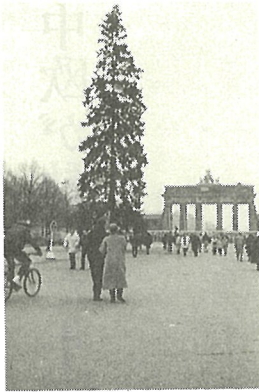
馬場 孚瑳江

一九八九年の始まりを、私は西ドイツの片田舎で迎えた。日本からは昭和天皇の死をきっかけにして沸き上った天皇制や戦争責任の問題、ひいては日本の近代化をめぐる様々な論議が、遠くの轟きのように押し寄せてきていたが、西ドイツ社会にも重苦しい空気がたちこめていた。というのもこの年は、ヒトラー誕生から百年、ポーランド奇襲による第二次世界大戦の勃発から五十年、ドイツの東西分断から四十年（西ドイツは、これを国の憲法に相当する基本法の制定から四十年、東ドイツは建国四十周年記念として祝う予定だった）にあたり、ドイツ人がいやでも次々と忌まわしい過去を直視しなければならない年だったからである。

先触れをなす出来事は、すでに前年から始まっていた。ヒトラーをウィーンのヘルデン・プラッツで熱烈な歓呼のうちに迎えたオーストリアが、五十年後の八十八年三月には、ドイツへのあの併合はナチスの犠牲だったと総括したのである。そうであっても、経歴に暗部を持つ人物をいまだに大統領に据えたままのオーストリアに対するドイツ人の不信感には根深いものがある。

たとえドイツの歴史がどれほど長くとも、最大の恥部といえば、「アウシュビッツ」に違いない。十一月九日は、ヒトラーの指示で、

シナゴグが焼き討ちされ、ユダヤ人が経営する店舗が襲撃されて、本格的なユダヤ人迫害の端緒となったいわゆる「帝国水晶の夜」から五十年目にあたっていた。これを機に連邦議会では、アウシュビッツからの数少ない生還者の一人である詩人パウル・ツエランの詩が朗読され、議長が反省の演説を行なったのであるが、内容に不適切な表現が多すぎるとして非難を浴び、議長はその夜のうちに辞任してしまった。議長の演説はドイツの人々に、八十六年から八十七年にかけて、ナチズムを歴史的に評価するかをめぐってなされた「歴史家論争」を想起させた。重苦しい空



6月17日通り(西)から望む

気が漂い出したのはとりわけこの頃からだったような気がする。

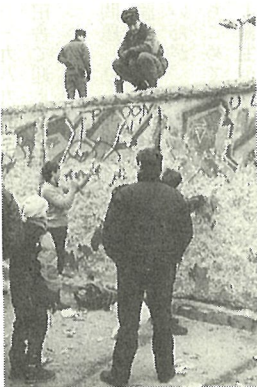
さらに現実政治のレベルで、追い打ちをかけるような事態が出現した。それは、西ベルリンの市議会選挙で与党が敗れ、社会党と緑の党の極左であるオールタナティヴ・リスト党との連合政権が誕生する一方で、極右の共和党が初めて議会に議席を獲得するという衝撃的なものだった。自称共和主義者たちはその後選挙の度に着実に勢力を延ばし続けているため、現在もおおきな政治的不安要因になっている。彼らに投票する人々は口々に、政府の外国人労働者や移住者・亡命者に対する政策は、外国人を優遇して、下層のドイツ人を切り捨てているばかりか、一般市民に重い税負担をかけている、と訴えるのだが、そ



チャーリー検問所

の主張の根底には「アウシュビッツ」以来、「恥ずかしいと思え」と言われ続け、事あるごとに「過去の克服」を課題としてきたことにうんざりしたドイツ人のナショナルな意識があると、とらえる人も少なくない。

八十八年秋は、もう一人意外な人物が注目を集めた。二十年前チエコで「人間の顔をした社会主義」の試みを指導して、ソ連の圧力に屈したドブチェクである。折しもその頃、いわゆる「プラハの春」の後バリーに亡命したチエコ出身の作家ミラン・クンデラの小説『耐えられない存在の軽さ』が、ベスト・セラーのトップを走り続け、この小説に基づいて作られた同名の映画も当たりを取っていた。二十年目の奇妙な符号の一致だった。ドブチェクは、イタリアのボローニャ大学から名誉博



東ドイツの国境警備兵

士号を授与されることになり、トルコ大使辞任以来初めて許されて出国したのである。めっきり老け込んでいたが、表情に当時と変わらない人間的善良さをたたえたドブチェクが、礼装してドクトル帽を被った姿は、心なしか哀しいピエロのように見えた。強い口調で当時の政策の正当性を訴え、ワルシャワ条約機構軍による武力鎮圧を非難しながらも、ドブチェクは、ソ連の作家ソルジェニーツィンと同様に国外追放されるのではないかと怯えていたからである。しかしそれもたんなる杞憂に終わって、彼は無事故郷に帰っていった。正直に言って、私はこれが生きているドブチェクの見納めになるだろうと、ほとんど確信していた。一年後に、やはり「プラハの春」以降反体制の知識人として当局から弾圧され続けてきた劇作家のハベルと並んで、ヴァーツラフ広場で民衆の歡呼に応え、そしてついには国民議会の議長に就任するドブチェクを見ることになろうとは、想像だにしないだったのである。今プラハの巷間で流布しているジョークは、「ペレストロイカとプラハの春との違いは？」と尋ねられて、「二十年」と答えることだという。チェコは、民主化の動き

をソ連の戦車に踏躰られた経験を共有するハンガリーと共に、新しい国家体制作りへの最短距離を歩むに違いない。

さてドイツとは対照的に、隣国のフランスは祝祭的気分にあふれていた。書店にフランス革命に関する出版物が夥しく並び、新聞・雑誌では革命の功罪が賑やかに論じられて、今年がフランス革命から二百年の記念の年にあたることを告げていた。七月の革命記念日に先立つ六月に北京で起きた天安門事件は、最近の中国に対して、開かれた社会主義の可能性を期待していた西欧諸国に、時代の齒車を逆回転させる蛮行として、アジアに対する失望と不信感をもたらし、パリのお祭気分にも水をさしたものの、革命記念式典それ自体はレヴェューのごとく、あくまでも華麗に挙行された。あの時、当代随一の人気女性歌手ジェシー・ノーマンが三色旗ながらの衣装をまとって、「ラ・マルセイエーズ」を歌うのを聞きながら、この年の後半に、世界全体の政治的・経済的枠組みを揺るがすような革命が、現実、ヨーロッパのど真ん中で頻発することを、誰が予測したであろう。

ベルリンの壁の崩壊で頂点に達するこの八

十九年後半の一連の政治的大変動の地ならしをした人物があるとすれば、それは間違いなくゴルバチョフ、さらに道を拓いた国があるとするれば、ハンガリーではないだろうか。この国では他の東欧諸国に先んじて、共産党の一党独裁を廃し、ハンガリー動乱当時の首相イムレ・ナジの名誉回復も行なわれるなどして、民主主義国家への模索がすでに始まっており、オーストリアとの国境に張りめぐらされた有刺鉄線の一部が切断されたりしていた。東ドイツ市民が東欧圏で最も広く西側に開かれた国であるハンガリーを頼んで、ぞくぞくブタベストの西ドイツ大使館に集まってきたのは、決して偶然ではなかったのである。

すべては、八月十九日にハンガリー・オーストリア国境で催された「汎ヨーロッパ・ピクニック」から始まった、といつてよい。この催しを主催したのは、両国政府、及びオート・フォン・ハプスブルクが会長を務める「汎ヨーロッパ同盟」。数時間国境を取り払って一時的に、ドイツ語で「ミッテル・ヨーロッパ」と呼ばれる「中欧」を開かれた自由な空間として現出させる象徴的な催しにするのが意図だったという。オート・フォン・

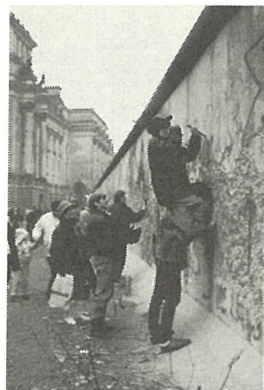
ハプスブルクとミッテル・オイローパ——この結びつきは、かつて北はボヘミア、ガリシアから南はバルカン半島の一部までを包括し中欧に広大な帝国として君臨していたハプスブルク帝国を思い起させる。事実、鉄のカーテンの向こう側で凍てついていた国々や民族がいつせいに動き出した様は、帝国の数百年にわたる統治にもかかわらず、多民族国家ゆえに絶えず民族の独立運動が勃発していた帝国末期の様相に酷似しているし、ユーゴであれ、ハンガリーであれ、チェコであれ、またルーマニアにしても、帝国が解体した後、社会主義圏に属するまでの三十年近い年月を、民族としてどのような国家形態で存在してきたかという歴史的体験までもが反映しているように思われるのだ。かつて帝国の南部を構成していた国々は、イタリアを含めて、相互に政治的・経済的協力が可能かどうか、ブタペストですでに話し合いを開始している。「ミッテル・オイローパ」が再び歴史の舞台に上る日がやがて来るかもしれない。

話を「汎ヨーロッパ・ピクニック」の日に戻そう。国境近くに集結していた約九百人の東ドイツ市民にこの催しの情報が伝わった

時、彼らのほとんどは、「国家公安局」の仕掛けた異と信じて疑わなかったという。しかし万にひとつの望みを託して、越境を敢行すると、国境警備兵は見えて見ぬふり。転がるようにしてオーストリア側に駆け込んだ人々は、無事を喜び、感きわまって泣きじゃくりながら、大地に接吻した。これが事実上の突破口となった。その後東ドイツ政府の威嚇にも似た警告にもかかわらず、市民たちは堰を切ったように、チェコもしくはハンガリーを経由して大学、西ドイツへ「エクソダス」を続けた。西ドイツの基本法によれば、東ドイツ市民は、望めば、西の市民権を獲得できるのである。西ドイツへ到着するやいなや、彼らは口を揃えて、「自由」とりわけ「旅行の自由」を得た喜びを語った。社会主義は、言葉を変えて言えば、フランス革命の理念「自由、平等、博愛」のあまねく行き渡った社会を求めているはずではないのか。それなのに、何何の自由という具体的な自由すらなかったのか。彼らの語る「自由」には、恐らく、「言論の自由」も含まれているに違いない。一説によると、市民の四人に一人は、国家公安局や人民警察への密告者だったといわれる。この

ような状況のなかでは、人は沈黙するか、嘘を言うしかない。辛うじて教会の壁のなかでのみ、真実が小声で語り合われた。ポーランドのカトリック教会のように、東ドイツではプロテスタント教会が反体制運動の拠点となった。「新フォーラム」のリーダーの一人、ボーライは、「言語喪失と偽りの国」と言いつつも、「再び言葉を発見する希望はある。立ち上がって、活動して！けれど西へは行かないで、通りに出て！」と呼び掛けた。西へ移住する市民が、二十、三十代の若い世代だとすれば、東に残って改革を試みようとする人々は、四十代より上の世代である。東ドイツの四十年と歩みを共にしてきただけに、彼らの苦渋は深く、機を捉えて各地で彼らが企てた大規模なデモンストレーションには、「再生」への真摯な願いがこめられていた。

十一月九日ーベルリンの壁の電撃的開放は、一方の「エクソダス」と、他方における東ドイツ市民の民主化を求めて頻発するデモとの挟み撃ちにあつてなされた決定であろう。しかし、これは世界的意義を持つ転回点となった。両ドイツの市民は、最初信じられずにあつけにとられ、やればばくしてか



壁のかけらが欲しい

ら喜びがきた。誰も彼も構わず、抱擁しあい、狂喜した。そして涙した。ナチズムと東西対立という二十世紀の二大悪を一身に背負ってきたドイツ国民の苦難の歴史を顧みれば、西ベルリン市長モンバーが言ったように、この夜「ドイツ人は、世界で最も幸福な民族」だったのは確かだった。ちょうど一年前の同じ日に、問題をあらんだ議長らの演説をうなだれて聞き、退席者も続出した連邦議会は、この知らせに超党派で喜びを分かちあった。そして誰からともなく立ち上がって、国歌「協調と自由・・・」を歌いだした。十一月九日は、こうして複雑なドイツ近代史に新たな一ページを加えることになる。一九一八年、ワイマル共和国の誕生。一九二三年、ヒトラーのミューンヘン・クーデター未遂。一九三八年、

帝国水晶の夜。そして一九八九年、ドイツ再統一の可能性を見いだした日。

「エクソダス」の最中に催された建国四十周年記念式典に招かれて出席したゴルバチョフは、なかなか改革に取り組もうとしない東ドイツ首脳に対して、「事に遅れる物は、なべて、人世に罰せられる」と語ったという。事実そうだった。旧体制のトップはもちろん、ベル



穿たれた壁

リンの壁が開かれてから二カ月もたたないうちに、その英断を下した人物でさえ失脚したし、彼の跡を継いだ民主化の切札的人物も今や無能・無策ぶりを批判されている。四十年間政権を独占してきたドイツ社会主義統一党は、反対勢力も加わった円卓会議をてこに、選挙までの暫定的な連立内閣で急場をしのがねばならない状況に追い詰められている。



和やかな交歓

八十九年の革命に二百年前の大革命と異なる点があるとすれば、この変動の過程で、特定のイデオロギーや知識人による上からの指導が一度としてその原動力とはならなかったこと、そしてルーマニアを除いては、血が一滴も流れなかったことであろう。「平和的」革命と呼ばれる所以である。憎悪をたぎらせはしたが、さすがに市民たちがギロチンまでは要求しなかったおかげで、旧体制の制度や党員は生き延びた。しかしまた反対勢力も十分育っていないがために、ダイナミックな政治力学が働かず、斬新で大胆な政策の構想を打ち出すことができないでいる。改革のテンポも著しく鈍い。東ドイツが現在直面しているジレンマのひとつは、恐らくそれである。今や東西両ドイツの市民はすべて、ビザな



ベルリン—'89年11月9日

して両国を自由に往来できるようになり、経済協力のみならず、共同の環境汚染対策、文化・教育面での交流も着実に始まっている。すでに三十五万人の市民が東から西へ移住した現在、それでもなお、一日に千から二千人の人々が東ドイツを離れて行く。「エクソダス」の続いている頃から壁の崩壊までは、東からの同胞を熱烈歓迎していた西ドイツ市民も、次第にその数に警戒心を強め、彼らが法的に特権的な優遇措置を受けていることに焦

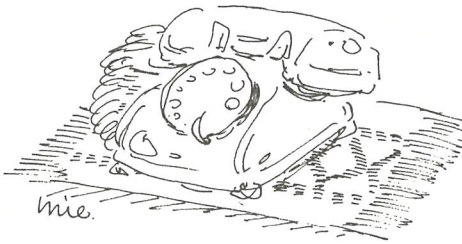
ち始めたのに対し、当初望んでいなかった「ドイツ再統一」を、今や東ドイツ市民のほうが熱望しているという皮肉な現象が起きてきている。あまりに落差のありすぎる、政治・経済・社会福祉面でのレベルをどう調整するのか。九十年は両ドイツとも選挙の年にあたり、東西ドイツの統一が世界政治の日程にあがった今、革命も両ドイツの関係も、宴のあとの冷静さを要求される第二段階に入ったといえよう。

八十九年の大晦日、私はベルリンのブランデンブルク門を取り巻く人波にもまれていた。壁の上だけではなく、門の上に聳える勝利の女神像までもが、若者たちで埋め尽くされている。門をはさんで向こうからも、こちらからも、引っきりなしに火花が打ち上げられ、その度にどつと歓声があがった。年の始めを覆っていた重苦しさはとくに吹き飛んでおり、新年を迎える喜びと解放の喜びが、二重、三重にも重なりあつて、人々の笑顔は輝いていた。凍てついたベルリンの空を突くように、アナーキーな熱気が満ち満ちている。あの十一月九日の夜もこうだったに違いはない。そしてこの爆発力が歴史を変える力にも

なるに違いない。一時的であれ、日常の市民的秩序をかなぐり捨てて、これほどのエネルギーを発散しうる若い力をほとんど羨望に近い思いでながめながら、私は、両ドイツが合することに、ドイツ文化の伝統が掘り起され、さらに骨太な発展を遂げるのを願いつつ、ひどく孤独だった。極東に生きる日本人にできることは、経済的関与しかないのか、私たちには、望むと望まざるとにかかわらず歴史の局外者に置かれる場裡があるのではないか、それでもなお、少なくとも関わった、あるいは関わっている歴史に対しては、まやかしのない歴史意識を持ちたい、そんな思いがしきりと脳裏を去来していた。

(大学法学部教授)

電話がかかってきたら……



玉井敬之

私は教師のはしくれである。それがあたっているかどうかは別にして、「先生」といわれている種族に属している者の一人である。その「先生」の仲間入りをしたのは、四十の歳になって、いわば人生の半ばに至ってからであった。そのためか、「先生」と呼ばれると、始めの頃は照れ臭く、なるべくならば止めてほしいと思ったことがしばしばあった。しかし、五十の声を聞く頃から、つまり命を知るようになった頃から、私は成り行きにまかせることにした。そして最近に耳順を迎えた。人がそのように呼んでくれるのなら、素直に従うことにしよう。だから「先生」といわれ

しかし、何よりも「先生」に値する人間でないことは、当の本人が一番よく知っている。その理由の一つとしては時代劇やサスペンス・ドラマが大好きなことがあげられる。もちろん、時代劇やサスペンス・ドラマの好きな「先生」がいることを否定しているわけではない。これが好きな「先生」は私の知人のなかにも、たしかにいます。しかし、「先生」は時代劇やサスペンス・ドラマが好きだとはいえないだろう。逆もまた真なり、とはいえないのである。

テレビでサスペンス・ドラマを私は観ている。たぶんどここの家でもそうだろうと思うが、テレビのある場所は昔風にいえば茶の間、今風にはダイニング・キッチンといわれているところだろう。一家団欒の場所なのだ。私の家ではそこに電話も置いてある。最近のサスペンス・ドラマは大体不自然な筋立てが多く、上出来のものが少ないのだが、それでも見出すとそれにひきずりこまれてしまうのは、私にあまり鑑賞眼や批評眼がないからだろう。すぐ夢中になってしまうのだ。こういうところもあるから「先生」といわれて恥ずかしくなるのである。

さて、サスペンス・ドラマの重要な小道具に電話があることは、誰しも認めるところだろう。ともかく一日の勤めも終えてほっとした気持で、そういうドラマを覗いているとき、突然、電話のベルが鳴ると、心臓がストンとお腹の下まで落ちたほどに吃驚する。もちろん、どんな場合でも電話のベルは突然に鳴り出すのだが、吃驚するのはサスペンス・ドラマを覗いているときに多いことは否定できない。「ああ、びっくりした」と家内は受話器を取りに行く。私だけではないのである。やはりサスペンス・ドラマに電話はよく似合う。それとも私たちが怖がりなのだろうか。

「はいはい、おります」という家内の声がして、受話器を私の方に差し出すので、惜しいけれども私は電話にでなければならぬ。「あ、先生」といって受話器の向こうで声がするのだが、その声に心あたりがない。また話をされている内容にも覚えがない。ようやくこれは息子にかかっていた電話だと気づく。自分の家の事情について書くのは気が進まないが息子も教師なのである。それに娘も高校や短大の非常勤講師をしているので、「先生」だけでは見当がつかないから、家内が勘違い

をして受話器を私に渡したのだ。こちらの方で相手がわかつている場合は何ということもないのだが、時には相当混乱することがある。三人が入れ替り立ち替り電話に出るというドタバタ劇を演じたこともあった。先方様のご存じのないことだけれども、当の相手がなかなか出てこないのでも余程困られたことだろう。家内がかかかってきた電話に、よく「どっちの方でしょうか」と訊ねていることがあるが、先方ではそのようにいわれて面食らっていることだろう。この頃は猫も杓子も「先生」とよぶ風潮になっていて、そしてそれはあまり歓迎すべきことではないと思うが、それでも「先生」という種族はこの国の人口比率からみて、そんなに大きなパーセントを占めてはいないはずなのに、それが我が家では混乱をきたすのである。やはり「先生」ではなく名前をよばれるほうがいいのは、これでもわかるのである。

しかし、こういう名前のよばれ方もあるのだ。つい最近のことである。夕食の時、電話が鳴った。娘が出たが私に電話だという。受話器をとると、若い女の声で

「タカユキさんですか」という。

「はあ、そうですか」

「わたし、ゼミの——ですけど」

学生からだったのだ。それがあまりにもアツケラカンとしていたように聞こえたので、「先生」にむかつてなんといういいかた、というような憤慨も慨嘆もほとんど起きる余地がなかった。私は閉口した、いや、開いた口がふさがらなかった。私はこれまでに「タカユキさん」と親しくいうのか、なれなれしくというのか、若い女性からよばれたことがなかった。おそらくこれからの慎重に考えてもその判断がつきかねるのだが、その時の私の顔は不覚にもゆるんでいたのではないだろうか。それだけにこれは私の「人生」にとつて一つの事件であった。後で当の学生から聞くところによると、あれは緊張のあまりに、思わずあいつってしまったのだという。

一人の友人がいた。いた、というのはすでにその友人は私とは別の世界に住むようになってしまったからである。文学上の先輩格にもあたるということもあって、私は強い親愛の気持を抱いていた。この友人が酔って電話

をかけてくることがあった。それがないがいはいたずら電話であった。いたずら電話という、最近では陰湿になって新聞紙上をにぎわしているが、かつては文壇で有名な作家が知人に電話をかけて、お互いに楽しんでいるというような他愛のないものであった。この友人の場合もそうであったが、しかし、いたずら電話をかけるというのは、実のところ、大変難しいことのように思う。

私たちは、この友人を中心にほぼ月に一回くらいの割り合いで、文学上の集まりを持っていた。この集まりは規約もないサロンの風のもので楽しい集まりであった。二十年近く続いた集まりで、私は不愉快な思いを一度もしたことがなかった。この持続と、楽しい雰囲気を支えていたのは、その友人の人間的魅力であったといえる。それはこの集まりに一度でも出席した人であれば、誰しもが認めるところであろう。この集まりは最後には必ず酒杯の応酬になったが、そのときもこの友人が中心であった。キタに流れて二次会となる。会が果てて帰るときは私一人になってしまう。多くは神戸とか池田とか吹田とかに住んでいて、奈良は私だけであったからだ。

これから一時間半ほどかけて帰るのに何時も淋しい思いがした。

あるときの集まりであった。例のごとく一人で私は家路についた。最寄りの駅から十五分かけて帰り着く。まだ皆は、二次会から三次会に移っている頃であろう。

玄関に入るとすぐに家内がでてきた。こんなことは珍しい。しかもその表情はなんともいえない奇妙なものであった。「どうしたんや」と聞くと、つい少し前にその友人から電話があった、という。あれ、今まで一緒に飲んでいたので何かあったのかと急に不安になった。家内の話すところによると友人はこんなことをいったという。それを再現すると次のようなことにもなるうか。

「××ですが玉井くんおりますか」

「あれ、今日は先生とご一緒だといっておりますが……」

「ええ、そうです。しかし、もうとうに帰っているはずですが……、(誰かと話している様子)しかし、不思議だなあ……、本当にまだですか」

「ええ、まだなんですが……」

「ふうん、おかしいなあ、(周りの人と話を

しているらしく、ぼそぼそとした声が受話器を通して聞えてくる)玉井くんと別れてもう大分になるんですがね、なあ、おい(と周りの人にいつている)」

「そうですか……」

「ちよつとこれは心配ですなあ……、大分酔つてたからなあ……」

「はあ、そうですか」

「奥さん、ちよつと心配ですな、いやまあ、

彼のことから、そんなことはないと思いますすけどねえ……」

「……」

「何にしてもちよつと、いま何時ですか、ほんとにもう帰ってないかんころですがね……、まあ、心配ないと思いますがねえ、

奥さん、彼が帰ってきたら大事にしてやってくださいよ。なんといつても、人間、一寸先は闇ですからなあ……」

「はあ、ありがとうございます」

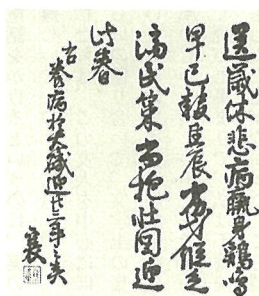
と、まあ、ほかにもいろいろと話をしたようだけれども、ざつとこんなやりとりのようであった。そして、受話器をおいて二、三分もしたら、私が帰ってきたのである。心配どころかそんな時間を見計らって、電話をしてき

たのだ。やられた、と私は思った。いつかこの仕返しと機会をうかがっていたが、とうとう果たすことができなかった。

いたずら電話というのは難しいものである。これができるためには、ある種の遊びどころがあつてそれがうまくあらわれなければならないだろう。相手の姿が見えないので表

情をうかがうことができない。これは一種の心理ゲームなのだ。その仕掛人になることは私には到底できるものではない。残念だが、私は仕返しを、攻撃を仕掛けることを諦めた。それから、彼から電話がかかってきたときには、私と家内は一方的に防衛体制をひいて、受け止めることになつてしまつたのである。

しかし、人間一寸先は闇、という言葉は真理である。私は拳々服膺することにした。そのためであろうか、折りにふれてこの言葉が浮かぶようになった。そして、この言葉をつぶやくとき、この友人を思い出し、無常の感にとらわれるのである。(大学文学部教授)



としました。

この影本は、明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎ 色紙(影本)

一葉一、〇〇〇円(送料一七五円)

(A) 「時危思偉人」

明治二二年一月徳富蘇峰の依頼に
えて揮毫されたもの。

(B) 「不止月下併能越 豈涉八州是我分」

壮図却促男兒淚 滴々跋為縷々文
明治二二年二月八日新潟伝道に従事

していた卒業生広津友信におくられた詩。

(C) 「送歳休悲病羸身 鶏鳴早已報佳辰 劣才縱乏濟民策 尚抱壯図迎此春」

明治二三年一月一日大磯百足屋で春を迎えて詠まれた。

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込み下さい。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金ください。

同志社収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話(〇七五)一二五一―三〇三七・八

新島襄の色紙の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に日常接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望に応じて、色紙の影本を、三点作成頒布するこ